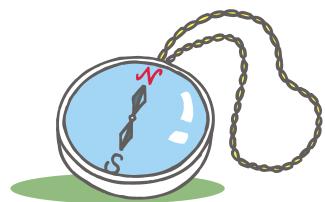


# 羅針盤



第30号

令和8年2月2日(月)

## ◆ 「雲の向こうは、いつも青空。」

「雲の向こうは、いつも青空。」これは、『若草物語』の作者として有名な、ルイザ・メイ・オルコットが残した言葉です。英語で表記すると、「There is always light behind the clouds.」(直訳：雲の後ろには常に光がある)となります。「雲」は、どんよりとして悪い状態、そして、「光(太陽)」は、晴れ渡ってうまくいった状態を指した比喩となっています。悪いことがあってもいいことが後からやってくるよ、といったことのようです。太陽自体は、いつでも雲の向こうにある。これを人生に置き換えてみると、「何もかもがうまくいかない」「どん底だ」と思っていても、向こう側にはちゃんと光が待っている。希望を捨てず懸命に雲を乗り切ろうとすれば成功を手にすることができるといったことを意味しています。オルコット自身が作家として名声を得るようになったのは、『若草物語』を発表した30代の半ばを過ぎてからだったそうです。もしかすると、書いても書いても作家としての評価を得ることができない、自らの下積み時代を振り返っての言葉だったのかもしれません。「雲の後ろにはいつも光があるんだ」という表現をすることで、困難な状況や悲観的な出来事の中にも、



必ず希望や明るい側面があることを示唆する格言であり、この心強いメッセージから多くの読者が救われたそうです。天気でいえば普遍のことではあります、見えていないだけのことで、実はいつもそこには光があるということ。雲に覆われしていても大丈夫なんだと。晴れることを願わなくとも、雲の上にはいつもまぎれもなく青い空が広がっている。誰かが気持ちを受け止めてくれて、いつでも「大丈夫、大丈夫だよ」と励まし続けてくれている言葉なのではないでしょうか。苦難を乗り越えた先には、必ずや「希望」という名の明るい未来が待ち受けていることを信じて頑張り続けてもらいたいと思います。

## ◆ 「鬼は外！福は内！」

明日、2月3日は「節分」の日です。「節分」といえば、「鬼は外！福は内！」といった掛け声とともに、豆まきをしたことを思い出す人もいるでしょう。豆をまいて邪気を家から追い出し、幸せがやってくることを願い行われる行事です。もともとこの「節分」という日は、年に4回ありました。「節分」の本来の意味は、文字通りの「季節の分かれめ」ということです。立春、立夏、立秋、立冬の前日が全て「節分」となるわけですが、その中でも「立春」が一年の始まりとなる重要な日であったために、「節分」が春の節分という認識が広まって、現在の「節分」の日となったそうです。そして、今日の「節分」では、豆まきをするときに、大豆を使うことが大半ではありますが、昔は米や、麦、粟なども使われており、穀物には魔よけの力があると信じられていたためだそうです。その中でも、大豆が使われることとなった理由は、大豆が鬼毒を殺し、痛みを止めるということが当時の中国の医学書に書かれていたことが由来だそうです。また、京都の鞍馬で毘沙門天様のお告げに従って、鬼の目をめがけて大豆を投げつけて鬼を退治したといった逸話も残っていたりするそうです。